「動いているのか、動いていないのか、それが問題だ。」

―英語における道具の<場所>表現と動きの中の不動性について―

福安　勝則

1. はじめに

太陽のような恒星(fixed star)もビッグ・バン（big bang）以来の宇宙の膨張につれて移動しているという。英語の fixed という単語によりその不動性を表現されているにもかかわらずである。また、大幅に時代はさかのぼるが、ポーランドの天文学者のコペルニクス（N. Copernicus）は太陽中心説を唱え、地球やその他の惑星は太陽の周りを巡回するとし、地球中心の宇宙観に反対した。おおよそ一世紀後にはガリレイ (G. Galilei) が「それでも地球は動いている」と地動説を支持したことも有名な話である。他が動いているか、自分が動いているか、双方とも動いているのか、動いていないのか。

地球上での身近な話からも悩ませられる。土地およびその定着物が不動産と呼ばれることがある。定着物とは建物や立木などのことであり、これらの不動産は船舶を例外として、現実には土地に定着して動かないものである。（首相官邸の移動のようにジャッキで建物ごとを持ち上げ移動される不動産の扱いにも関心があるが。）日本語では文字どおり「動かぬもの」扱いとして表現され、英語では、real estate, real property と呼ばれることもあるが、immovable estate, immovable property, fixed property, immovables とも呼ばれる。「不動の」を意味する immovable や fixed が英語においても用いられている。地球全体は動いており、その一部である土地やその定着物も動いていても、地球上においては、いわゆる「不動産」は不動のものとして認識され、そのように表現されているのである。

動いている乗り合いバスの中を考えてみよう。運転手が通学児童に向かって次のよう

にアナウンスすることがある。「バスの走行中は危険ですので動かないでください。」小学生は座席に座り動かなくても、生徒はバスとともに動いているのだが…。また、同様に、救急車の中で搬送される怪我人に対して、「できるだけ動かないようにしていてください。」と指示する場面があるかもしれない。

さらに、対象に近づいた場合を考えてみよう。例えば、大掃除の日に、洗面器で水を運ぶ親の手伝いをしている子供が水を縁まで入れてしまい、「水がこぼれるから、動さないように気をつけて持ってきなさい。」と親に言われた子供の姿を想像してみよう。（大抵の場合、床に水をこぼしてしまうが、）一所懸命に注意を払って両手で洗面器を動かさないようにしながらゆっくりと運んでくる。

本小論では、道具、器具、備品、家具、機械、乗り物等の人工物の表現の用法について考察し、ものの捕らえ方--動いているとみるか、動いていないとみるか--が、英語の表現にどのように関わるかを考察する。第 2 節では、道具とは何かを明確にし、意図的道具と現実的道具を区別する。第 3 節では中右（1996）の固定位置の原理を紹介し、第 4 節では乗り物の英語表現の＜場所＞扱いについて中右（2004）の分析を用いるとどうなるかを示し、固定位置の原理の妥当性をさらに支持することになるデータが存在することを論じる。第 5 節では、固定位置の原理を認めたうえで、より広範な道具の表現を説明できる修正版を提案する。

2．道具について

道具について論じる前に、まず次の二つの区別をしておくことにする。

(1) a.　意図的道具

　　b.　現実的道具

ここでいう（1a）の「意図的道具」とは、しばしば物の分類で、文化類（cultural kinds）という言葉で示されるもので、一定の機能を備えた文化的人工物のことである。[1] 敢え

てこの言葉を使う理由は、自然物と異なり、ある機能をもたせることを「意図して」作り出された人工物であるからである。機能が内在的特長として際立ち、必ずしも実際に使われなくても道具であると呼ぶことができる＜もの＞である。例えば、消しゴムは文字を消すことを意図して作られ、実際に使用されなくても、道具であるということができる。その意味で、同様に、コップ、ノコギリ、コンピュータ、鉛筆、冷蔵庫、自転車、バス等で指し示される文化的人工物を意図的道具と呼ぶことにする。

これに対して、(1b)の「現実的道具」とは、動詞で表される状況、場面で動作主に用いられると解釈される参与者のことである。動作主（A）が或る対象物（B）に影響を与える際に、別の物（C）に力を加え、そのCを通してBに影響を与える場合、このCを現実的道具ということにする（A＝Bの場合も含まれる)。例えば、文字を消すという動作・出来事の中で用いられるものが現実的道具であり、消しゴムの場合もあればその他の場合もある。上述の意図的道具は必ずしも現実的道具として用いられるとは限らない。

実際に＜もの＞が道具（手段）として用いられる場合、その用いられ方は様々であろうが、意図的道具との関係でいくつかのパターンが考えられる。

(2) a. 彼は食パンを*トースター*で焼いた。
  b. 彼は*金鎚*で釘を打った。
  c. *トースターの上に*食パンを置いた。
  d. *トースター*で子供の頭をなぐったという新聞報道があった。
  e. 子供たちは*焚き火*でサツマイモを焼いていた。
  f. 子供たちは*草の葉*でその曲を上手に表現していた。

(2a, b)は、意図的道具が現実的道具として用いられる場合であり、(2c)は、意図的道具が現実的道具として用いられていない場合である。また、(2d)は、意図的道具がその意図されていない方法により現実的道具として用いられた場合であり、(2e, f)は、意図的

道具でないものが現実的道具として用いられている例である。(以下、意図的道具と現実的道具の区別の必要の無いとき、あるいは脈絡から明白なであるときは、単に道具という言葉を用いる。)

道具はその意図された機能どおりに用いられない場合があると同時に、本来機能を持たないものも現実には道具として用いられる場合もあるが、次節では、(2a)のような状況における日英語の道具の見立ての差についての興味深い論考を概観する。

3. 固定位置(fixed position)の原理

中右(1996)は次のような原理により、英語話者がある実体を<場所>と見立てる条件を提案している。

(3) 固定位置(fixed position)の原理

英語話者が、動詞の表す状況のもとで、ある実体を<一定の場所に固定した状況で用いるもの>と把握するとき、その実体は<場所>と見立てられる。

これにより、日本語では、「で」格名詞句の<道具>扱いのところが、英語では<場所>扱いであることが説明できるとしている。

(4) a. I weighed myself *on the bathroom scales.*

b. We cooked the pie *in the brick oven.*

c. We washed our clothes *in the washing machine.*

d. She sawed the dresses *on the sawing machine.*

これらの道具、家具、備品、機械類は、ある一定の場所におかれ、固定した状態で用いられるものである。また、持ち運びができても、用いるときに固定位置をとるという点が、英語で<場所>と見立てる論理に決定的な要因であるとしてトースターの例をあげている。

(5) Lucy is toasting the bread for Linus *in a toaster.*[2]

次例（6）のような楽器、ネクタイの裏地、手拭きタオルなどの表現に関する興味深い議論は省略するが、固定位置の原則により、これらの場合も同様に説明できることが論じられてる。

(6) a. I played the Moonlight Sonata *on the violin.*

b. He polished his glasses *on the lining of his tie.*

c. "It's all right." Francesca said, wiping her eyes *on the towel hanging from the cupboard door.*

次節では、固定位置の原則（3）の「英語話者が、動詞の表す状況のもとで、ある実体を＜一定の場所に固定した状況で用いるもの＞と把握する」という点について、さらに詳しく検討する。[3]

4．動かさずに動かせるか？

一見内部矛盾するようなこの問いは、前節でみた固定位置の原則を適切に解釈、理解する上で有用である。まず、次の例文を考察してみよう。

(7) a. 糸の位置を動かさずに引っくり返す。（編み物の説明）

b. 一歩目の左足の時は手を動かさずにボールを保持して、、、（ボウリングの投球の説明の一部）

c. キックで手を動かさずにプールの中ほどまで行けた。（水泳の感想の場面）

編み物の例では、固定された糸の相対的位置は変わらずその全体が移動している。ボウリングの例では、一歩移動する間、ボールと人との相対的位置は変わらない。水泳の例では、移動するあいだ手は動かさないで、体ごと手も移動していることになる。日常の動き・出来事の中に、固定された部分とそれが固定されている全体とが共に動く（移動

する）という事象が存在していることをこれらの例は示している。このような状況では、全体が動いていても、固定されている要素と固定されている場所の関係は変わらない。

このことを踏まえると、中右（1996 ; 2004）でも扱っていないが、次の（8）のような英語の例に見られる道具の＜場所＞としての見立ても、(3) の原理から説明することができる。

(8) John carried the water from the well *in a pail.*
（ジョンはバケツで井戸から水を運んだ。）

このようないわば、＜持ち運ぶ＞場面の記述には興味深い統語的・意味的現象が存在する。

(9) a. Bring it over here but don't move it.
（それをこっちに持ってきなさい。でも動かさずにね。）
b. Don't move it while you bring it over here.
（それをこっちに持ってくるあいだ動かさないようにね。）

これらの文では、一見、動かさずに移動することは矛盾するようであるが、(9) の move は距離の移動ではなく、運び手上での動きを問題としており、実際に運び手上では動かさないことが可能であるという認識を反映していると述べることができる。実際に重いバケツを運んでいる場面を思い浮かべてみると、バケツはいわばバケツを持っている腕により固定されていると見ることができるほどである。(9) のように言えることから、(8) の状況はバケツを動かさずに動かす（移動させる）ことができると言える状況であり、固定位置の原理により＜場所＞としての見立てが説明できるのである。

例文（8）でもうひとつ注目すべき点は、道具（pail）の固定先が道具の使用者（動作主 John）であるということである。この点はついては、後に考察する観光バスのところでも言及する。

中右（2004）では、英語話者の＜場所＞の見立ての論理は次のように提案されている。

（10）ある実体が①すでにそこにあって＜固定位置（fixed position）＞をとり、②＜静止して動かない stationary＞ものと知覚されるとき、その実体は＜場所＝位置空間 Location＞と見立てられる。[4]

これは、本質的には固定位置の原則（3）と同じ線上にあると考えられるが、②の部分について少し掘り下げて検討してみたい。中右（2004）の軌道上を移動する乗り物とその表現方法に関する on についての一般化をはじめとした議論は非常に興味深く、多くの示唆に富むものである。ただ、（10）の見立ての論理とその講義の第 5 節、6 節の乗り物の表現との関係については明確には示されていなかった。ここでは、バスなどの乗り物も道具・手段（文化的人工物）である以上、原則（10）は乗り物にも当てはまると仮定されているとして、どのようになるのか筆者なりに論を推し測り進めてみることにする。

（10）の見立ての論理は話者によるものである以上、その話者が道具との関係において同じ状況に参与している場合、つまり乗り物などにその話者が同乗している場合は、話者がその乗り物を「＜静止して動かない＞と知覚する」ことは、大いに考えられる。中右先生の挙げられた例のうち、次のようなものがそれに該当すると考えられる。

（11）a. We rowed across the lake *in a boat.*

b. I drove around the lake *in my motorboat.*

c. I took her up *in the elevator* to the top floor.

これらの例で示される状況では、道具の使用者と道具の位置関係は変わらず、いわば固定されており、道具は静止して動かないと知覚するに十分な状況であるといえる。

しかしながら、話者がその動詞であらわされる状況の外にいる場合、その動いている

乗り物を話者が「＜静止して動かない＞と知覚する」とは、必ずしも言えないのではないだろうか。話者がその乗り手になった場合を頭に描き発話するのであれば別であるが、乗り手と乗り物が同時に動いていることは知覚できるとしても、常に乗り物を＜静止して動かない＞と話者が知覚するとは限らないであろう。次の(12)で考えてみよう。

(12) a. Tom drove to work *in a new automobile.*

b. The bride rode to her wedding *on a white horse.*

c. A cameraman *in a helicopter* followed the chase until the police caught him. 中右（2004）

（12）における自動車、白馬、ヘリコプターは静止して動かないと話者が知覚する、と考える理由が無い。むしろ、これらの場合、＜静止して動かない＞との知覚は道具（乗り物）の使用者（あるいは利用者）から眺めた時その使用者（利用者）が持ち得る乗り物の静止性である。乗り物に乗っている人は乗り物が等速で進んでいる場合、乗り物の外を見なければ動きを感知できないことがある。また、乗り物の動きの方向の知覚を左右するのは外の動きであることは、通過する電車の向きにより錯覚することからも判明する。したがって、②を生かすとすると、「その実体の使用者がそれが静止して動かないと知覚していると英語話者が判断できる状況であるとき」というような趣旨に述べなおす必要があると考えられる。

次例（13）も中右（2004）からのデータであるが、特に言及をしたい例文を含んでいる。

(13) We meet your plane on arrival on the date specified on your I-20. We will meet you at the gate at the Memphis International Airport, transport you to campus *in a chartered bus* free of charge, and help you settle into your dormitory.

この例文は、紙面の都合上、詳細は省略するが、貸し切りバスは路線バスと異なり、一定の軌道上を移動するわけではないので on ではなく in が用いられる、ということを説明する「軌道運行の原則」の好例として挙げられている。[5]

ここでは on と in の区別の問題には立ち入らず、そもそも何故 in が用いられるのかについて、貸し切りバスとその借り手の観点からこの文を考察する。(13) の例文の場合、「乗る人 (you) が乗り物に対する静止性を知覚している状況であると話者が判断した」のではなく、貸し切りバスを道具 (手段) として捕らえているのは、(チャーターをして) 輸送する輸送者 (transporter) であり、輸送者である大学関係者とそのバスとの関係が重要であることを示している。(13) の We は大学関係者であることは文章の内容から明白であるが、この関係者がメンフィス国際空港に出かけていき、そこから貸し切りバスでキャンパスまで学生を輸送するということも読み取れる。つまり、道具の使用者である大学関係者もバスに同乗している状況が読み取れる点が、重要である。(もちろん、同乗していなくても同様に、輸送道具の責任がバスに付随している。) つまり、大学関係者はバスに乗っておりバスは輸送者 (使用者) にいわば固定されていると見ることができる。この例文における in a chartered bus のこのような扱いは、中右 (1996) の固定位置 (fixed position) の原理からも支持される。「動詞の表す状況のもとで、」つまり、輸送するという状況のもとでという条件を考慮に入れると、乗る人 (you) というよりも輸送者と輸送車の関係を分析に持ち込むことが妥当であると結論づけることができる。この例は、中右 (2004) の「軌道運行の原則」に当てはまる例と対比をなす例として提示されているが、むしろ「固定位置の原理」を支持する興味深い例であることを指摘しておきたい。したがって、(13) の in a chartered bus は上述の例文 (8) の in a pail と平行的な用法であると言えるのである。

(14) a. John carried the water from the well *in a pail.* (=(8))

b. We will transport you to campus *in a chartered bus* free of charge.

5．修正拡大版固定位置の原理

以上、(3) の固定位置の原理と (10) の英語話者の＜場所＞の見立ての論理は基本的に正しく、修正することで、固定されている家具、備品、機械類に加え、移動しながら物を運ぶ道具（バケツ等)、使用者自体が運ばれる乗り物（ボート等)、同乗している乗り物の輸送者（使用者）が乗る人を運ぶ乗り物（観光バス等）が＜場所＞扱いされる例を統一的に説明できる可能性を見てきた。もう一度検討しておくことにする。

(15)　固定位置（fixed position）の原理　　　（＝（3））

英語話者が、動詞の表す状況のもとで、ある実体を＜一定の場所に固定した状況で用いるもの＞と把握するとき、その実体は＜場所＞と見立てられる。

この原理の説明は、すこし曖昧な点がみられる。例えば、2節でみたパターン（2d)「意図的道具」の主たる機能が「現実的道具」の機能とずれている場合で考えてみよう（次の「トースターで」は、英語では＜道具＞扱いとなり with the toaster となる)。

(16)　トースターで子供の頭をなぐったという新聞報道があった。　　（＝（2d））

(15) でいう「動詞の表す状況」とは、(16) では殴るという状況であるが、この状況のもとで (15) の「ある実体」とは何のことを指すのであろうか。意図的道具である「トースター」のことであろうか、現実的道具である「トースター」のことであろうか。「ある実体」が現実的道具であるトースター（殴る道具として機能するもの）を指し示しているのであれば、＜一定の場所に固定した状況で用いるもの＞と把握されず、＜場所＞とは見立てられないので非文法的な文は作られない。しかし、もし、「ある実体」が意図的道具のトースターを指し示しているのであれば、＜一定の場所に固定した状況で用いるもの＞と把握され、＜場所＞と見立てられることになり、非文法的な文になる。つまり、(15) の記述は、道具とその機能が十分生かされる状況を念頭においた内容であるように思われる。つまり、トースターでパンを焼くというような状況である。そうで

あるならば、次のような道具の機能を中心に据えた、状況設定を組み込んではどうであろうか。

(17) 修正版 固定位置（fixed position）の原理

英語話者が、意図的道具の本来的機能・内在的特徴が十分発揮される状況のもとで、ある実体を＜一定の場所に固定した状況で用いるもの＞と把握するとき、その実体は＜場所＞と見立てられる。

この変更は、トースターはパンなどを焼くこと、洗濯機は洗濯すること、体重計は体重測ること、バケツは物を入れたり、物を運んだりすること、乗り物は人や物を乗せて移動することのような、道具の本来的に意図された機能が充分満たされる状況、言い換えれば、（意図的）道具の本来的・内在的機能が現実的な道具の使用に用いられている状況での規則性をとらえた原理であることを意味する。

もうひとつ、(10) の英語話者の＜場所＞の見立ての論理：「ある実体が①すでにそこにあって＜固定位置（fixed position）＞をとり、②＜静止して動かない stationary＞ものと知覚されるとき、その実体は＜場所＝位置空間 Location＞と見立てられる。」の②の部分を次のように修正することを提案した。「その実体の使用者がそれが静止して動かないものと知覚していると英語話者が判断できる状況であるとき」である。或る状況全体が動いていても、その動く状況内にいる道具の使用者と道具の関係と、“動かない”状況内にいる道具の使用者と道具の関係との間に共通性を見い出し得るという点がこの見立ての論理には存在しているようである。意図的道具としての実体は、ある側面みれば移動していようといまいと、一定の場所に固定されていると知覚される、あるいは使用者にそう知覚されていると英語話者が認識できれば、＜場所＞として見立てられるといえる。

したがって、(17) のままでもよいが、このことをあえて (17) の修正版固定位置 (fixed position) の原理に加えるとすると次のようになる。

（18）修正拡大版　固定位置（fixed position）の原理

意図的道具の本来的機能・内在的特徴が十分発揮される状況のもとで、ある実体が移動していようがいまいが、その実体をその使用者が＜一定の場所に固定した状況で用いるもの＞と把握していると英語話者が判断できる状況であるとき、その実体は＜場所＞と見立てられる。

この原理により、乗り物の使用者からは相対的に動いていないバイク、モーターボート、自動車等の乗り物は乗る人に固定されていると把握され、＜場所＞と見立てられる。ローラースケートやアイススケートの＜場所＞の見立ても同様に説明される。

（19）a.　I like to skate *on roller skates.*　(Nakau 2004: 6)

b.　People rarely skate backward *on roller skates.*　(*Improved Roller Skates Mainly for beginners*)

さらに、中右（2004）では扱われてないが、「長いブーツで」、「下駄で」のような場合もこの原則が働いていると考えられる。下駄は、with でもなく、on でもなく in をとる点は興味深い。鼻緒と台で表される位置空間を占めていると見立てられてると言えよう。

（20）a.　I cannot ride *in long boots.*

b.　the guy... runs the marathon *in Japanese wooden clogs....* (*Island Scene*)

6．おわりに

本稿では、英語の道具表現について主に中右（1996; 2004）の主張を考察し、英語における道具の＜場所＞の見立てについての固定位置の原理の妥当性を検証し、その基本的考え方を支持する形で修正拡大版を提案した。その際、道具の概念を意図的道具と現

実的道具の２つに明確化し、（意図的）道具の本来的に意図された機能の重要性を固定位置の原理の中に導入した。また、中右（2004）では明確にされなかった（と思われる）英語話者による乗り物の＜場所＞扱いを、「道具の＜場所＞としての見立ての論理」を用いて幾分の修正をしながら説明を試みた。さらに、講義では扱われなかった＜持ち運ぶ＞概念とそれにかかわる道具使用、そしてその変形である「運び手も乗り物で移動しながら人・物を運ぶ」例が発表のデータの中に存在していることを指摘し、固定位置の原則を支持する例であることを論じた。修正拡大された固定位置の原理により、家具、備品、機械類、楽器類を始め、ボート、自動車、バス、エレベータ、馬、ローラースケート等の乗り物、さらにはブーツや下駄等の履物を含めて、扱われた道具が移動するしないにかかわらず、統一的に説明できることを示した。これが正しいとすると、動いていても動いていなくても、道具を＜場所＞と見立てる場合の重要な点は、固定位置の原理が捕らえているところの、「実体を＜一定の場所に固定した状況で用いるもの＞と把握できるかどうか」ということになる。

註

1. 文化類（cultural kinds）については、Lyons (1977)を参照。
2. （2d）の事件は実際のニュースで報道されたものであるが、殴る道具として用いられる場合は、英語では with the toaster となる。註 4 参照。
3. 日英語でどのような場合にどうして見立てに差が生じるかについて、福安(1997)の 4 節、5 節を参照。
4. 正確には、（10）は次のような＜道具＞の見立てとともに記述されている。

   ＜道具＞か＜場所＞か：英語話者の見立ての論理　ある実体が①＜行為者 Actor の片腕ひいては代役＞として働き、②＜行為者と一体となって動く move＞ものと知覚されるとき、その実体は＜道具 Instrument＞と見立てられる。道具は行為者によって思いのままに操られ、行為者の意図を実現するための手段である。その一方、ある実体が①すでにそこにあって＜固定位置 fixed position＞をとり、②＜静止して動かない stationary＞ものと知覚されるとき、その実体は＜場所=位置空間 Location＞と見立てられる。　中右(2004: 3)

   ＜道具＞の見立てに関して、福安（1997: 226-227）では次のような原則（i）と、「動作主の片腕助力」であると把握する場合の誘因（ii）が提案されている。

   (i)　「動作主の片腕助力」の原則

（英語）話者が、動詞の表す状況のもとで、ある実体を<「動作主の片腕助力」>であると把握するとき、その実体は<道具>と見立てられる。

(ii)a. コントロールできる（と認識される）実体である。

b. 動詞で表される状況に直接に関与する（と認識される）実体である。

5. 中右（2004）の「軌道運行の原則」とは、次のような対比を説明する。

(i) We rowed across the lake *in a boat.*

(ii) We went to France *on the ferry.*

概略、交通機関の乗り物は「一定の軌道上を移動する」がゆえに、on を用いる。上例の(ii)は軌道は目には見えないものの、「あらかじめ決められた運行経路がある」ため、その軌道をはずれて移動することができない。したがって、次の鉄道の場合のように on が用いられるのである。

(iii) She will be arriving *on the five-thirty train.*

参考文献

Fillmore, C. (1968) "The Case for Case," in E. Bach and R. Harms, eds., *Universals in Linguistic Theory*, 1-90, Holt, Rinehart and Winston, New York.

福安勝則 (1997) 「道具と見立て」『鳥取大学教育学部研究報告人文・社会科学』第 48 巻第 2 号. 223-231.

Jackendoff, R. (1987) *Consciousness and the Computational Mind*, MIT Press, Cambridge, MA.

Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, MA.

中右 実 (1996) 「<道具>扱いか<場所>扱いか・・・日英語にみる知覚の癖と構文型」筑波大学、未刊行論文.

中右 実 (2004) 「言語と認知と文化のインターフェイス—なぜ in a car なのに on a bus なのか—」筑波大学最終講義.

Nilsen, D. (1972) *Toward a Semantic Specification of Deep Case*, Mouton, The Hague.

Lyons, J. (1977) *Semantics*. Vol. 2, Cambridge University Press, Cambridge.

Schlesinger, I. (1989) "Instruments as Agents: on the Nature of Semantic Relations," *Journal of Linguistics* 25, 189-210.

鳥取大学教育地域科学部英語学研究室

e-mail: kafukuya@fed.tottori-u.ac.jp